植草学園大学研究紀要　第５巻　75～83頁（2013）

B. Edu. Health Sci. UG Univ. vol. 5, 75-83, 2013

資　料

幼稚園教育のいくつかの課題

―「幼稚園教育が直面する複合課題に関する共同的研究」まとめとして―

太田　俊己［1］　植草学園大学発達教育学部
植草　一世［2］　植草学園大学発達教育学部
浅川　繭子［3］　植草学園短期大学福祉学科
広瀬　由紀［4］　植草学園大学発達教育学部
多田　昌代［5］　植草学園大学発達教育学部
相磯　友子［6］　植草学園短期大学福祉学科
高倉　誠一［7］　植草学園短期大学福祉学科
田村　光子［8］　植草学園短期大学福祉学科
根本　曜子［9］　植草学園短期大学福祉学科
黒田　静江［10］　植草学園短期大学福祉学科
松原　敬子［11］　植草学園短期大学福祉学科

Several Issues on Kindergarten Education: From Outcome of the Cooperative Study of Multiple Issues Faced with Kindergarten Education

Toshiki OTA　Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University
Kazuyo UEKUSA　Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University
Mayuko ASAKAWA　Welfare Department, Uekusa Gakuen Junior College
Yuki HIROSE　Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University
Masayo TADA　Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University
Tomoko AISO　Welfare Department, Uekusa Gakuen Junior College
Seiichi TAKAKURA　Welfare Department, Uekusa Gakuen Junior College
Yoko NEMOTO　Welfare Department, Uekusa Gakuen Junior College
Shizue KURODA　Welfare Department, Uekusa Gakuen Junior College
Keiko MATSUBARA　Welfare Department, Uekusa Gakuen Junior College

幼稚園教育がかかえる複合的な課題を検討する目的で，1幼稚園を対象に共同研究を実施した。以下のような課題別に共同研究者は研究を分担した。今日的な幼稚園教育の意義を確認する意図で子どもの主体性尊重の保育を，また障害幼児や外国人幼児を含む保育の意義を検討する意図で，その具体的な保育を，さらに，子どもや家族に幼稚園教育が果たす意義を検討する意図で，保護者から示唆される課題について研究を実施した。幼稚園教育に寄与する諸点を見いだした。

キーワード：幼稚園教育，子どもの主体性，障害幼児，外国人幼児，保護者

［1］著者連絡先：太田　俊己
［2］　植草　一世
［3］　浅川　繭子
［4］　広瀬　由紀
［5］　多田　昌代
［6］　相磯　友子
［7］著者連絡先：高倉　誠一
［8］　田村　光子
［9］　根本　曜子
［10］　黒田　静江
［11］　松原　敬子

To investigate several issues on kindergarten education, we conducted collaborative research based on three themes: Child-centered education and the purpose of kindergarten education today, the concrete educational examples of children with disabilities and children from foreign countries and what education means for them, and the problems of kindergarten in the view of the parents. As a result, some findings were made which will be useful for the future development of kindergarten education.

Keywords: Kindergarten education, Child-centered practice, Children with disabilities, Children from foreign countries, Parents

1．問題と目的

本稿は，平成20年度および21年度に実施された植草学園大学共同研究「幼稚園教育が直面する複合課題に関する共同的研究」（研究代表者　太田俊己）の研究報告書から，主な内容についてまとめ直し，報告するものである。

日本における幼稚園数は，13,500園あまり，園児数は163万人を数える。小学校１年生の児童に占める幼稚園終了児の割合は67％となっている（いずれも文部科学省平成21年度学校基本調査）。これらの数値は年々，減少を示している。我が国全体の少子化傾向の中で，一定の在園幼児数を占め，幼児の教育において役割を果たしている幼稚園であるが，現実にはいくつもの実践課題をかかえている。

例を挙げれば，預かり保育や２歳児就園の増加等に伴い，かつてとは異なる幼稚園運営上の課題，幼児の生活環境に関して社会的な変化が指摘される一方，そのために豊かな幼児期の生活を幼稚園として保障するための保育上の課題，障害のある幼児や外国人幼児を含む保育のあり方，また家庭と連携していくための課題等々である。

本研究では，以上のような幼稚園教育が抱える現状の課題を受け，中でも次の三つの課題について明らかにすることを意図した。

その第一は，子どもの主体性を尊重する保育についての課題，第二は，障害のある子ども・外国人幼児を含む保育の課題，第三は，保護者から示唆される課題の三つである。

第一の課題は，自主的，意欲的に，よりよい自分のあり方を追究していく主体性を，幼児期からどのように豊かな保育の実現で保障していくかに関わるものである。社会の変化が著しい現況で，幼児期の豊かな生活を実現する幼稚園教育の意義について再確認する意図を含んでいる。

第二の課題は，今やどの幼稚園にも関係する障害のある幼児，また外国人幼児など配慮を要する幼児への対応について，幼稚園が果たす保育実践の意義を明らかにする意図をもつものである。

第三の課題は，保護者たちの述懐から得られる幼稚園教育の可能性を確認する意図を有している。述懐を寄せた保護者は，いずれも障害のある子の保護者であった。十分とは言えない時代状況下で，幼稚園教育がその子や家族に果たした役割や限界を探り，今日的な課題への示唆を得たいと考えた。

以上のように，本研究は幼稚園教育の抱える今日的な課題の中から上記３課題について検討を行い，今後への幼稚園教育への示唆を得ることを目的とした。なお，本研究は，障害のある子どもを受け入れて永年の経験を持つ１幼稚園を調査対象とした。その他の特徴も持つ園であるが，一つの幼稚園のかかえがちな複合的な課題を検討する上では，1幼稚園の複合的な対応を併行して見ていくことが適当と考えたためである。

2．方法

2．1　研究期間

平成20年９月より平成22年３月までを研究実施期間とした。

2．2　研究対象とした幼稚園

１幼稚園（葛飾こどもの園幼稚園）に，本研究の協力を依頼した。本園は，研究代表者の太田と永年，共同的に研究を行う関係にあるところから選定した。

例年，日本保育学会の大会に研究発表を行う研究的な体質ももつ幼稚園である。

本園は，例年およそ幼児130名を受け入れている私立幼稚園である。キリスト教保育，自由保育，障害等のある幼児への個に応じた保育の３点に力点をおいて保育を展開している。クラス分けに当たっては異年齢保育を行う意味から，各年齢幼児を５分割し，５クラスとして編制。どのクラスにも例年，２～４名の障害等のある幼児が在籍する。したがって全園では20名以上の障害等のある幼児が在籍する特徴を有している。補助金も得て，１クラス当たり３名の教師が担任する形態をとり，うち１名の教師が障害幼児や支援を要する幼児に配慮しながら，インクルーシブにクラスを運営するユニークな体制をとっている。

２．３　研究方法

本研究の研究分担者（植草，浅川，広瀬，多田，相磯，高倉，田村）は，実施する課題毎に分かれる形で研究を分担した。研究代表者（太田）は，研究の進行を統括し，対象園との連絡調整に当たった。

分担者は対象幼稚園の教師たちと打ち合わせ，実施スケジュールと実施方法を課題毎に確認し，幼稚園の年間行事予定等と調整を図りながら適宜打ち合わせを設けて研究を進めた。

具体的な実施方法は課題により異なる。「保護者から示唆される課題」については，園から各保護者に内諾を得ていただき，その後，郵送により当時の状況を述懐した原稿内容について回収した。他の２課題については，分担者が実際の保育場面を月に１度程度のペースで参観し，適宜観察記録を取り，同日に関係する教師たちと話し合いを設け，実践経過や進捗について情報を得た。参観ができなかった場合は，教師たちとの話し合いの場で，中間の経過を確認し，研究内容に関する情報を入手するようにした。幼稚園の教師たちも主体的に園内の研究を進め，互いの成果をともに検討することも行った。

平成21年度末には，本学にて研究分担者・協力者と幼稚園の関係者とで研究総括のための協議会をもち，研究のとりまとめを行った。

なお，本共同研究に関して協力者である根本，黒田，松原の３名は，対象園を訪問し，調査を実施する上での協力および考察において助力した。

３．子どもの主体性尊重の保育と幼稚園教育～幼稚園における絵本に親しむ実践とコーナー活動にかかわって

本園の保育において，絵本に親しみ，活用してきた経緯を歴史的に追い，一方，コーナー活動で子どもの表現に着目した実践例を取り上げ考察する。

３．１　葛飾こどもの園幼稚園の保育の変遷

葛飾こどもの園幼稚園の保育ならびに絵本の取り組みの変遷を資料により跡づける。

①　１期：1954年～1961年ごろ

開園２年後より，「こどものとも」購読を園として開始。絵本研究者の松井氏を講師に，講演会「絵本について」を開催，研修を行った。絵本の物語を取り入れる保育を開始。

②　２期：1962年～1981年ごろ

家庭でも「こどものとも」購読を奨励。絵本の読み聞かせが積極化。劇遊びの開始。観劇会も始める。自由遊びに物語を生かしたごっこ遊びを入れた保育を展開，劇遊び会に発展。

③　３期：1982年～1997年ごろ

母親の絵本懇談会が盛んになる。絵本に関する研究「子どもの活動を促進するためのコーナーの工夫」を実施。運動会に当たる青空フェスティバルについて絵本の内容をテーマにした展開を取り入れる。林間保育も，「エルマーのぼうけん」のイメージを取り入れた活動に切り替える。平常のコーナー遊びの中にも絵本のテーマを取り入れる。

④　４期：1998年ごろ～現在

身近な動物から広がるファンタジーを実践的に研究したり，絵本から広がる遊びや表現活動に取り組んだり，また絵本（三びきのやぎのがらがらどん，エルマーのぼうけん）から粘土の造形遊びへと発展させたりしている。

３．２　絵本の楽しさを保育に取り入れる試み

平成４年の林間保育では，絵本のテーマを取り入れる実践を行った。この実践記録を読み解き考察す

る。

① 年間の体験活動と絵本の関わり

記録からその時期の体験活動とそこで活用した絵本のテーマを抽出し，表に表した。その結果，年間の各種の活動（開園記念日，園外保育，林間保育，遠足など）で，いくつもの絵本のテーマを関係づけた結果，子どもたちがテーマを共有し，イメージ豊かに活動に取り組む様子が明らかになった。

② 障害のある幼児の事例から

Ｆちゃんの実践例では，７月の野外での林間保育の折に，絵本「エルマーのぼうけん」のストーリーを楽しみ，事前活動では絵本の動物になりきったごっこ遊びを，林間保育の現地では「ジャングル探検」を楽しんで山登りする姿が見られた。いずれもそれまでに見られない想像的で関わりの中での遊びであった。

３．３　コーナー活動の取り組みから

クラスの活動から「はみ出しがち」のＳ君と「おばあちゃん先生」との間で，午前中のコーナー活動における緩やかな関わりの保育を経て，Ｓ君の絵画表現が豊かになった経緯が見られた。

園庭の「ちゃぼ小屋」近くではおばあちゃん先生の展開する緩やかなコーナー活動が行われた。Ｓ君以外の子も加わり，お店ごっこ，描画，ちゃぼの世話，ちゃぼの孵化の見守りなどが展開された。Ｓ君もちゃぼの絵を自分から何枚も描いた。園庭の片隅でのおばあちゃん先生のコーナー活動が触れあいを求める子どもたちにとって安らげる機会を提供するものである点を考察した。

（以上，植草論文から）

４．子どもと保育者が相互主体的な関係の保育を行うために～葛飾こどもの園幼稚園の記録の工夫

４．１　相互主体の保育を求めて

幼稚園における保育では，子どもと保育者がともに主体性を発揮した主体－主体である関係をめざすべきという主張がある。子どもは主体的に遊びを展開し，保育者はその傍らで主体的に教育的意図を発揮して関わるということになる。しかし，主体－主体の関係で実践するための計画の立て方について明瞭な方法は存在しない。

加藤[3]は，面白い実践はさまざまな形で発生する偶然の出来事をつなげながら作られていくこと，そこで重要な意味を持つのが保育者の対話能力であり，またその対話能力に基づく「ひらめき」であるとしている。また，保育実践を記録して振り返ることで「ひらめく」ようにもなるという。確かに実践の中では実感としてそう感じる。一方，「ひらめく」ためにどのようなことに気を配っているかについて，より確かな形で明らかにしたい。

葛飾こどもの園幼稚園では，子どもたちの主体性を生かすために，保育者がどのような働きかけをしたらよいかをテーマに保育に当たっている。３人の保育者がテーマを持って，意識的に記録した実践記録の中から，子どもと保育者が相互主体的な関係の保育を実現するために，保育者が「ひらめく」ための手がかりについて検討したい。

４．２　保育者の記録から

保育者Ａについては，アヒルの飼育に関する４点の記録について考察した。子どもたちの興味と保育者の意図との関係は，記録から見ても，初めからうまく結びついた。子どもたちのアヒルに関心を寄せる自発的な声が出るのを待ち，タイミングを逃さずに子どもの声を拾っている。教師はそれを面白がって，クラスの一員として参加する様子がうかがえる記録であった。

保育者Ｂについては，クラスの年長児が互いに関わって取り組める活動が見つからず悩んだ時期にとられた記録であった。子どもの声に保育者は耳を傾けようと心がける。そのうちに朝一番の子どもの声が，その日の遊びに影響を与えていることに気づく。そのため，記録の形式を，登園してすぐの子どもの声を冒頭におく形式にしている。

保育者Ｃでは，これまでの自分の保育スタイルを改善するため，子どもたちの記録とともに「自分の提案」と「子どもの提案」の欄を設けてみた。子どもからの自発的な声を期待し，環境設定に留意もしている。

４．３　考察

保育者Ａのように子どもとの関係が持てると子どもとのやりとりの中で「ひらめき」が生まれる。保育者ＢやＣの実践でも，子どもたちの興味と保育者の意図の関係に対して，自分の特徴に合った記録方法で探っていることがわかる。その結果，両保育者とも，これまでよりも子どもたちと響き合った保育をすることができた，とても楽しかったと実感できる保育となった。ここから，子どもと保育者が相互主体的な関係の保育を実現するための記録は，子どもとの関係がうまくいっている時には，思うままに書いて十分であるが，そうでない時には，自分にあった内容を整理した記録の方式が効果的であるといえるであろう。

この園では，昨年よかったからその形式を採用するようにはしない。このように形式を固定化していないところが興味深い。初めは，保育者自身が自分を客観的にとらえ，その上で自分の特徴に見合った形式を考えている。こうした方法を検討し，考える行為が大切な点であったと考えられる。

葛飾こどもの園幼稚園では実践そのものも引き継がれないし，記録の形式も引き継がれていない。ただ引き継がれていることは，子どもの声を聞くためにはどうすればよいかを基本に，これまでの自分の実践をふまえ，自分にあった記録方法を考えるというスタイルである。このことは，子どもと保育者が相互主体的な関係の保育を実現していくためのひとつの手がかりとなるに違いない。

（以上，浅川論文から）

５．障害のある子どもや気になる子どもを含む保育の対応をめぐって

５．１　小グループでの活動とクラス活動との関連を強める試み

葛飾こどもの園幼稚園は，比較的多数の障害のある子を受け入れ，どの子の保育も充実をするよう幼稚園教育を進めている。午前９時から10時ごろまでは，障害のある子や保育者から気になる子どもなどを対象に，2階の遊戯室で，個別的な関わりを重視する小グループ活動の実践を続け成果を上げている。

しかし，ここでは固定された教師によって小グループ活動が展開されるため，他の教師にはそこでの子どもの姿がわかりにくいといった課題があった。そこで，平成20年度には，小グループ活動と（同じ子どもが）クラスに戻った際の活動と関連を図る意味から，子どもに意義ある保育を追究することにした。以下に園の実践研究に沿い，その要因を考察することにする。

５．２　実践研究の計画と実践

三つの実践期に分かれた。１期は，話し合いと各児の個別プログラム作成，活動と子どもの様子の把握であった。

２期は，多くの教師が小グループ活動に参加し，子どもへの理解を深めた。また，その小グループ活動における対象幼児たちの様子について，なるべくクラスでの活動に結びつけるよう教師たちで検討し，実践として展開した。３期は実践のまとめを行った。

５．３　考察

教師たちが小グループ活動に参加し，そこでの子ども理解をクラスでの活動他に展開するここでの試みは，それぞれの対象幼児について成果を得た。つまり，小グループ活動とクラスでの活動等が，うまく連動し，どの子にも充実した保育がより展開できたと考えられた。

その要因を考察すれば，①保育カンファレンスが年間を通して行われたことが挙げられる。教師間の経験等の違いを超えて，本音を出し合い，保育や子どもの見方を検討する機会が継続的に行われたことにより，違いをふまえた教師集団が形成され，保育への思いや展開をその都度再構築できたことが要因として考えられた。また，②園全体で挑戦的な試みであったことも挙げられる。

小グループ活動にそれまで参加経験のない教師が入る試みを行ったが，これは容易にできる試みでもない。現状の園の体制で必要なことについて共通認識をもつための話し合いが行われ，また，その内容を全体の体制へと移行できるまでの本園の文化が大きな役割をもつと考えられた。

5．4　柔軟な保育を意図した取り組み

本園では３名の保育者が１クラスを担任する。クラス内での必要な対応を行う際に，職員の配置など保育体制を柔軟に組み替えることも，配慮を必要とする子どもがいる場合には求められる。

取り上げた事例のうちの一つは，結果として乱暴な行為に及ぶ入園児である。できる限り３人の担任のだれかが本児に付く体制をとった４月であったが，他児が怪我する事態が生じた。そこで別な保育者１名（園長）も本児に付いて保育に当たる４名体制をとるようにした。１か月あまり経過するうちに，本児もよく遊ぶようになったため，教師は見守る援助へと移行することができた。幼児の様子および保育の必要性によって，柔軟に保育を組み替えることも重要であると考えられた。この背景として以下の３点について考察した。

担任と園長も加わっての連日の話し合いがその一つである。その日の出来事を話題に，その場で大切にすべきことを話し合い，けがの場面を作らない，悪いことはその場で伝えることを共通の基準としていった。話し合いが教師の判断を導いた。

二つ目は，５月の誕生会で園長が率先して本児に対応したため，これもきっかけに，本児への担任の姿勢に変化が生じたことである。本児に直接に担任が正面から向き合うことが増した結果，担任と本児との関係が急激に好転したと考えられた。

本園での小グループ活動に本児も参加するようになった点が３点目である。楽しく，満足して遊び，活動できる機会が確保され，本児の過ごし方が大幅に好転したことも挙げることができた。
（以上，広瀬論文から）

6．外国人幼児の在籍と保育上の課題

6．1　外国人幼児とその在籍状況

本園では，外国人幼児が複数在籍するものの外国人幼児は幼稚園になじんでおり，特に問題等は生じていなかった。一方，千葉市のある公立保育所では，外国人幼児が多数在籍し，様々な課題を抱えていた。そこで，両者の外国人幼児の在籍状況と幼稚園における外国人保護者との交流状況，保育所における課題を検討することとした（千葉市保育所の調査結果は本論文では割愛）。

本園において両親またはどちらかが外国人である幼児は５名在籍した（2009年）。内訳は，母親が中国人，父親が日本人の子が１名，両親ともに韓国人が１名，父親がオーストラリア人で母親が日本人の子が２名（双生児の１名は障害がある），父親がアメリカ人で母親が日本人の子が１名である。

6．2　日本人保護者と外国人保護者の交流

本園では，保護者が保育活動や行事に参加する機会が多く，保護者によるサークル活動も盛んである。また，併設する教会に通うことで家族同士の交流が生まれることもあるという。こうした交流の場の例として，毎月の誕生会を取り上げる。

誕生会では，誕生月の子どもたちの保護者が参加し，劇などの出し物を行う。衣装や小道具も保護者が準備する。誕生会の準備をするため保護者同士が数回の打ち合わせを行う。2009年６月10日の誕生会では，オーストラリア人の父親が誕生会の劇に参加した。劇が終わり，クラスにもどると，誕生月でお祝いされた子どもたちと一緒に保護者がおやつを食べ，オーストラリア人の父親も子どもは帝王切開で生まれたことなどを話した。保護者からの質問に日本語では説明できないため英語で話し始めると，別の保護者が通訳をするなど，保護者同士の自然なフォローが見られた。

本園では，外国人幼児は落ち着いていたが，それは日本人保護者と外国人保護者が毎月の誕生会等，様々な行事を通じて交流を持ち関係を築いていることも影響していると考えられた。外国人幼児は，家庭内と幼稚園での言葉や文化の違い，保護者の不安な心理状況などを敏感に感じとる。しかし，日本人保護者と外国人保護者が関係を築いていることにより，外国人保護者は幼稚園での“幼稚園文化”ともいうべきものを知ることができる。また，外国人保護者にとっては，心理的な安定にもつながるであろう。これは外国人幼児が幼稚園になじむ際の下地となると思われる。日本人保護者も外国人保護者との交流があるため，外国人保護者にどのようなフォローをすればよいのかを知っていた。

このように誕生会といった園の行事に共に協力し

合って参加することにより，日本人保護者と外国人保護者が交流を深め，外国人幼児の幼稚園での生活に良い影響を与えていると考えられた。

６．３　考察

本園では，外国人保護者と日本人保護者の交流が進んでおり，それに伴って外国人幼児も幼稚園に馴染んでいた。一方，千葉市の保育所への調査結果では，外国人幼児への対応に追われるだけでなく，育児観の違いから生じる外国人保護者への対応にも困難を感じていた。保育者が当該国の育児観を知り，日本の育児観を伝えること，保育者の相談の場を設けることが必要であり，一方，通訳の確保や小学校との連携の課題があることなどを指摘した。
（以上，相磯論文から）

７．保護者における幼稚園教育の意味

７．１　幼稚園教育と保護者の役割

本園は，昭和42（1967）年から障害のある障害のある幼児を受け入れてきた。先駆的な実践といえる。当時の園長（現理事長）は，「統合保育は，幼稚園だけの努力ではない。むしろ，保護者の応援があって成り立つのである」と言う。本園は，保護者との厚い連携を模索し保育を追究してきた。保護者が主体の定期的な活動，また地域での作業所づくり等にも結果としてつながっている。今後，幼稚園教育の課題として，障害のある幼児への対応が注目されよう。本園に着目し，当時の保護者と幼稚園の状況を考察することは，今後への一助になろう。初期に受け入れた障害のある幼児とその保護者，それを知る教師の資料をもとに考察する。

７．２　方法

① 対象：障害のある受け入れが始まった昭和42～50年における在籍児の保護者21名，また当時を知る教師２名から情報を得た。現園長からもコメントを得た。

② 調査内容および期間：保護者には当時の状況に関する回想文の執筆を依頼した。執筆にあたっては，子どもが幼稚園に在籍していた頃の状況，a.幼稚園に預けた経緯，b.幼稚園時代にうれしかったこと，ありがたかったこと，助けられたこと，c.幼稚園時代に苦労したこと，の３事項を含めるよう依頼。高齢となった保護者に配慮し，事項ごとの枠は設けなかった。

③ 当時を知る教師２名には，返送された保護者３名の回想文を読み，当時を振り返って自由に執筆するよう依頼した。現園長には，保護者及び教師から寄せられた回想文を読み，現在の状況と含めながらコメントを依頼した（本稿では，教師１名と現園長分は割愛した）。調査期間は以下の通り。

④ 保護者：平成21（2009）年11月～12月
教師・園長：平成22（2010）年２月～３月

７．３　結果

① 保護者からの回想文
３名の保護者から寄せられた回想文のうち，１名についてその全文を，以下に掲載する。

保護者Ｏ氏：在籍期間　昭和42～44年度。母親

我が家の長男Ｋはわが家にとって初孫で真夏の暑さの中，昭和34年７月19日に誕生し，静岡から主人の父と母が上京し，体重4,750グラムと大きな赤ん坊を見て，鼻はＯ家の鼻だ等と言い，大変喜んでもらいました。身体的には何の遅れもなく知能もやっと歩くころには絵本を読んであげると自分でページをめくり，よく理解できていましたし，テレビのお母さんと一緒の歌はすぐおぼえ，歌っていました。

一歳には三輪車に乗り，消防車が通りの道を鐘を鳴らして通ればすぐ窓からのぞくし，こちらの言うことは理解しているので，何の問題もないと親はおもっていましたが，ただＫからの言葉はなく要求は「ウッフン」ですませその要求により「ウッフン」のニュアンスが違い，それを母親はすぐわかり先回りして言ってしまっていました。

二歳になり，妹が生まれ，おばあちゃんが上京し母親が入院中面倒をみてくれました。このときはじめて「あーあおっこちちゃった」のおばあちゃんの言葉を真似て本人からはじめて言葉が出たそうです。それからは口から息を吐いて言葉が出ると思い風船をふくらます，ストローでシャボン玉を飛ばす等と水道の水をジャーっとながす，戸をガラッとあける

など擬音を使い本人にも言わせて要求も言葉でいうまで待つようにし，少しずつ言うようになってきました。妹が足で立つことができず小児科では太っているからでしょうと言われましたが，M病院で診断をうけたところ，先天性股関節脱臼とわかりギブスをしたまま母親は病院通いをすることなり，Kはレコードをつけたり絵本を見たりで，ひとり遊びが多くなりました。妹は専用の椅子に座り，テレビをみてなんでもしゃべってお兄ちゃんに教えていましたが，わずらわしい様な顔をしてひとりで庭の隅に坐ったりする情緒不安定な姿が見られ，紹介されて小児科の先生に診断を受けました。運動能力はあるし，単に言葉の遅れだけでしょうと言われましたが不安になり妹も通院していた東大病院で小児神経外来に連れて行きました。自閉症と小児ノイローゼの中間だと僕は思うと医者に言われ，遊戯療法があると愛育研究所のグループセラピーに参加させてもらいました。一年半通いました。

このグループやほかのいくつかのグループが話し合い東京自閉症児（者）親の会が発足しました。そのあと千歳船橋のＩ先生のところや池袋のＥ幼稚園などへも通いました。妹がこどもの園へ入園したので行事のたびにＫも連れて参加しました。もう７歳になっていましたが家政大学の女子学生についてもらう条件で何とか入園となりました。

２年目は妹も小学校へ行くようになり母親がついて，回りの園児たちとかかわり，その中にＫも入れてもらうように努めました。時には一日中園バスに乗っている日もあったり，アヒルの卵を大事そうに手で持って帰ったりして，日々母子楽しく通園しました。卒園した後も協会の行事で夏の安達大良山，冬の武尊山も参加しました。今でもお祈りの言葉はしっかり覚えていて，実家の墓の前でアーメンをとなえています。

② 教師Ｔ氏の回想：開園の昭和29（1954）年から勤務。男性

今から45年前，教育学科を卒業し，幼稚園の開園を目指す時期に，ハンディのある子のことはまるっきり考えてみることも無かった。10年程した時期にある父母が入園を申し込みに来た。それに対し,「うちの園では見てゆくことが出来ませんので」と断っていた。その方が１年して妹を連れ入園を申し込みに来た。ごく普通に受け入れた。「この子はどうでしょうか」「わたしのほうでボランティアを付けて登園させますけど。」これには反対も出来ず「それでは」と言うことで，自然統合と申しますか，補助を付けた形で受け入れることで入園を受け入れた。しばらくして母親からこの障害についてこんな資料がありますけれどと，ガリ版刷りの冊子を受け取った。付いてくれた学生も熱心だったが，母親の熱意に押し切られて，保育が始まった。

（保護者Ｏさんのこと）

「世界中で○○チャンの母親はわたしひとり」。この母親はその前後，東京自閉症児親の会に関わり，区の情緒障害児学級つくりに励み，作業所作りにも力を尽くした。当園最初の入園者。しかし，意気込みがものすごい。園の為にも，地域の為にもよく働いてくれた。母親の強さ，すばらしさが何時会っても感じられる。

７．４　考察

実際に寄せられた回想文は，保護者として障害のある人とともに人生を歩んできた苦労と喜びの思いの伝わるものであった。３氏に共通していたのは，障害をもっていても，幼稚園に通わせたいという思いが強かった点であろう。教師達は，保護者の熱意によって，徐々に統合保育に取り組んでいった。初めは障害のある子どもたちの様子に驚きながらも，諦めずに受け入れ，経緯とその苦労が了解された。保護者の回想文には卒園後の苦労の方が多く書かれている。教育の始まりの幼稚園に対する思いは強い。障害をもって生きる家族を支援するスタートとしての幼稚園のあり方の重要性を示唆しているといえる。

障害のある子を持つ保護者にとって，幼稚園の果たす役割には，我が子を受け入れることとともに，家族を支える存在としての意味があろう。また，保護者には重要な「同行者」との出会いの場となる意義も幼稚園はもつものと考えられた。幼稚園にとっては，障害のある子の受け入れは保育実践の質的向上にも，また障害理解を早期から地域の中で育む上で，保護者とともに取り組みを構築する意義にもつながるものとなろう。

（以上，高倉・田村・根本論文から）

８．謝辞

私たちの厚かましい申し出に丁寧に応じてくださった葛飾こどもの園幼稚園と諸先生，ならびに調査にご協力いただいた保護者の皆さまに深甚の謝意を表します。

９．文献

1) 太田俊己･植草一世･浅川繭子･広瀬由紀･多田昌代･相磯友子･高倉誠一･田村光子･根本曜子･黒田静江･松原敬子. 植草学園大学共同研究「幼稚園教育が直面する複合課題に関する共同的研究」研究成果報告書. 2011
2) 葛飾こどもの園幼稚園.「保育ノートⅧ」. 2003
3) 加藤繁美. 対話的保育カリキュラム<上>理論と構造. ひとなる書房. 2007
4) 柴崎正行編著.「保育方法の探求(第2版)」. 建帛社. 2005
5) 加藤惟一. インクルーシブ保育に関する葛飾子どもの園小史. 保育の実践と研究. 2007; 3: 9-20
6) 葛飾子どもの園幼稚園. 葛飾子どもの園幼稚園創立40周年記念誌. 1994
7) 葛飾子どもの園幼稚園. 葛飾子どもの園幼稚園創立50周年記念誌. 2004